

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

会報

Forum for Furusato Kasugai Studies

NO. 69

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

2019. 9. 15月 発行

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第69回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ 『ふるさと春日井の寺子屋教育』

令和元年8月11日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ：『ふるさと春日井の寺子屋教育』と題して、河地清氏(本会会長)に講演していただきました。

参加者は14名でした。



講演する河地 清 氏



会場風景



2019.8.12(月)中日新聞

―発表要旨―

はじめに―近代教育の前史「寺子屋教育」について―

画一化を目指した明治政府、現在の日本の教育の出発点です。日本が現在の大国になった原点は明治維新です。明治維新以前は 300 ぐらいの藩が独自に地域を治めていましたが、維新により明治政府が統一する中央集権国家になりました。結果として東京一極とか大阪、名古屋を含めた 3 極に集中する社会になりました。農業が基本であった産業が工業に転換しました。各地で話されていた方言を標準語に統一しました。教育も寺子屋や藩校で独自に行っていたものを全国同じ教育にすることになりました。

一言で言えば日本中を画一にするということが明治政府の政策に共通する特徴でした。

明治 5 年に「学事奨励に関する被仰出書」が出て「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」という目標達成のために採用された方法が画一だったのです。校舎は文部省が見本を設計し、全国に同じような木造校舎が建ちました。教材は国定教科書にし、教育方法も師範学校で教師を教育し統一しました。言葉について全国で統一するために各地の方言を調べ、東京山の手言葉を標準語にして学校で教えました。1925 年にラジオ放送局が東京、名古屋、大坂に誕生します。最大の使命は標準語を全国に浸透させることでした。

明治政府が画一を目指したことは大成功だったのです。明治時代は農業社会から工業社会への転換を推し進めましたが、工業の重要な特徴は画一だからです。工業社会では同じ製品を大量に生産し、国民が同じ物を大量に購入することが重要です。明治時代の画一政策は間違っていないのです。その結果、鉄鋼生産は 1980 年にアメリカを抜いて世界一になりました。造船も 1975 年には世界で生産した鉄船の半分は日本の造船所で生産されるまでになりました。自動車も本家のアメリカを 1986 年頃に抜いて世界一になり、DRAM という半導体メモリーも 1986 年にアメリカを抜いて日本が世界一になり、世界で使われている半導体メモリーの半分が日本製という時代になりました。

産業の近代化（資本主義化）は、前史として **Manufacture**(工場製手工業)の広範な発展が見られたことが日本資本主義経済社会成立の重要な前提であったことと合わせて、広範な「寺子屋」の存在は、経済力の発達段階とともに近代教育成立の前提条件として重要な条件の一つでした。そして、前近代社会における寺子屋教育の広範な普及は、高い庶民の識字率とあわせて、高い教育力をこの地域にも醸成されていたことが知見できました。

そのことが、日本社会近代化を支える条件となる知的基盤をつくりだしていたということが言えるのではないかと思います。この報告を発表するにあたって、下記の《参考文献・資料》を参照しました。

春日井市史/東春日井郡誌/春日井の歴史物語/春日井の散歩道/「勉強」時代の幕開け（江森一郎）/私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー―（R・ルビンジャー）/日本の私塾（奈良本辰也）/愛知の寺子屋（丹羽建夫）/学びの系譜―人は何を求め、何を学んできたか・・・（名古屋市博物館特別展）/江南市史/高蔵寺町誌/愛知県教育史/日本教育史資料（文部省）/江戸の教育力（高橋 敏）

1. 寺子屋教育はどのような様子で行われていたか。



上図は、左が渡邊崋山筆「一掃百態」、右が『春日井の歴史物語』（春日井市郷土史研究会刊 昭和 61 年）に描かれた江戸時代の寺子屋の風景です。今までの教育史分野における研究によれば、全国に 7 万にも及ぶ膨大な数の寺子屋が存在していたと言われています。中には、机を縦横並列に並べ今日の教室のような形式で運営していた寺子屋もあったが人数の多いところに限られていて全体の一割に満たない程度であったと言われています。（『勉強』時代の幕開け』（江森一郎）平凡社選書）机の配置は千差万別であり一様ではありませんでした。今日の教室から見れば実に雑然としているように見えるけれども、大らかで自由奔放な様子にも見えます。やがてこの状況は明治新政府の、「学事奨励に関する被仰出書」発布以後、「机と椅子」、「掛図と黒板」が一律、画一に整備されることにより、教育の近代化は進んでいきました。子供の一人一人の進度・能力に合わせて個別指導をしていた寺子屋師匠の教育環境は、良きにつけ、悪きにつけ一変してゆくこととなったのです。「寺子屋教育は、一斉授業ではないから、子供自身は進度の飛躍による挫折・混乱を感じずに済み、欠席ということじたいによる圧迫感も少なかった。この一事だけをとっても、寺子屋の姿がいかに人間の本来性に適合している面があったかが知れる。」（江森『前掲書』）今日の教育問題を考える上で幾つかの示唆に富んだ問題を提起しています。

2. この地域の寺子屋教育の普及状況から何がわかるか



左図は天保年間の寺子屋分布図をしめしたものです。『愛知県教育史』（愛知県編刊）○印の範囲は、現在の春日井市域（春日井郡）を示すものです。

江戸時代が相対的に 100 年以上にわたり平和が持続した社会であったことにより、固定化強制されたといわれた身

分制度社会にも「公」と「私」の境界が文字文化の普及により弛緩し、教育・文化を媒介として地域社会への教養の広がりが進んでいきました。(『江戸の教育力』高橋敏 ちくま新書) 庶民の街道と言われた「下街道」を尾張藩士であった横井也有(本名時般)が俳諧を通じて商人の長谷川三止と親交があったことは「公」と「私」「本音」「建て前」が使い分けられた一事例です。このことは、庶民の教養(知的水準)の向上を示す社会的環境が醸成されていたということができ、各階級の移動の規制も事実上は大きく弛緩していました。福沢諭吉が本音と建て前を使い分けて長崎へ遊学した事例、庶民がお陰参りをした事例は、階級制度を基盤とした封建社会が徐々に解体・崩壊へと進んでいった一過程でもあったことを示しています。また、寺子屋の広範な普及は、経済的発展(生産力向上)と比例して各地域に分布していることもこの図はしめしています。分布点の密度の高い地域を見てみると、尾張地域(中島、丹羽郡)、が最も際立っています。言うまでもなく、この地域は農業生産力の発展した地域です。Manufacture(工場製手工業)生産が広範に発展し、地域は農村工業(織物)地帯化することにより、「読み書きそろばん」といった基礎的教養のみならず「商売往来」「世話千字文」など、契約や計算の知識・技術の知識が必要となりました。社会に適応して行く知識、教養を身につける必要性は高まっていました。

幕末期に至るまでの日本全体の知的基盤は社会支配階層(武士)から一般庶民階層(農・工・商)まで寺子屋教育の広範な広がりによって知的水準を高めていった様子が垣間見られる。

3. ふるさと春日井地域における寺子屋教育



図1. 岡島佐平碑(松河戸町)

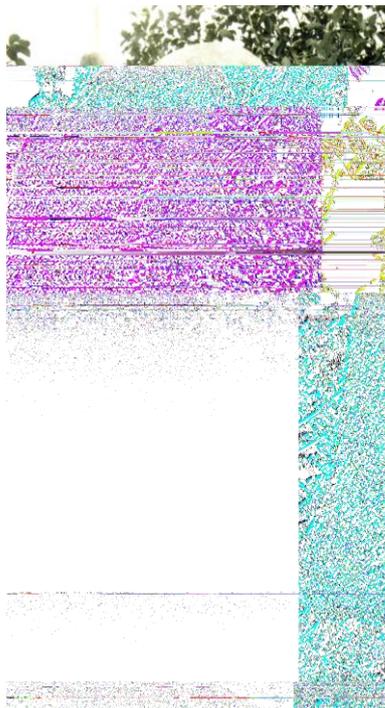
岡島佐平先生は、慶応二年(1869年)松河戸で寺子屋開かれました。この碑は門人たちによって明治11年(1879年)に建てられた「筆子塚」です。こうした「筆子塚」は、地域の人々が尊敬と信頼を一心に集めていた寺子屋師匠の遺徳を偲んで門人達によって

建てられたものであり。寺子屋に対する信頼度を示す点で意味は大きいと思います。この地域にもこのような「筆子塚」は数多くあります。地域教育に貢献しかつ尊敬されていた師匠（教育者）がいた証として今日に伝えられています。（図2．図3．図4）



図2 良甫先生碑（大手町） 図3 故堀邦雄先生碑（大留町） 図4 森龍之介先生之碑（下原町）

4. 一地域の特色ある教育—「言玉雄歌依根大人碑」に見る国学教育の普及



市内高蔵寺に向けて走る県道沿いに位置する神明社という社の境内にある碑です。木立の片隅にひっそりと建っています。高さ一メートル程の自然石に碑文「うごきなく玉の柱をつきかため神の正道ふみわけよ人 門弟中建之」碑陰「明治七年戊九月十二日歿 故訓導小林宜泰」とあります。

図5 言玉雄歌依根大人碑（大留町）

小林宜泰は、代々社家（神社に世襲的に奉仕する神職家のこと）の出自です。記録によれば、門弟の中にはこの地域の有力な村落指導者となる「林 金兵衛」「堀尾茂助」が学んだことがわかります。宜泰についての詳細は残念ながら不明ですが、尾張藩明倫堂の儒学者で高名な植松茂岳に師事したことが『植松茂岳 第一部』（植松 茂著）記

されています。茂岳は実家小林家から植松家（有信）を継いだ略歴があります。

門弟の堀尾茂助は宜泰から国学、皇典、入木道をまなんで多感な少年期を過ごしたようです。明治維新に際しては、農兵隊「忠烈隊」を組織して尾張藩の為に活躍し、優れた農民指導者として地域行政・振興につくしたことはよく知られています。林 金兵衛も、宜泰の他に水戸藩の浪士でこの地に来た熊野神社神官富田主税と言われる人に国学、皇典、入木道を学んでいます。金兵衛も維新に際して「草薙隊」という農兵隊を編成して尾張藩に尽くしました。新政府下で起きた地租改正反対騒擾を一人の犠牲者も逮捕者も出さず収束させた手腕と活躍振りは歴史に残る出来事として今日まで語り継がれています。このように、この地域の優れた行政指導者を生み出した教育の原点となった小林宜泰は大留と大森（名古屋市守山区）に寺子屋をもち多くの門弟に影響を与えていました。「尾張の大蔵」様と尊敬を集め尾張一円から門下に入るものが後を絶たなかったといわれています。まさに、この碑は、地域教育に尽くした小林宜泰の頌徳の碑です。碑文の「言玉雄歌依根大人」は、言玉（言霊＝神の発する言葉）を歌に詠み人々に日本古来の明き清き心を啓蒙した徳の高い人といったような意味のものであり、師（宜泰）に対する最大級の賛辞を表現した碑文となっていることがわかります。傍らの歌とあわせてこの碑を見つめるとその遺徳の大きさが迫ってくるようです。（記録：河地 清）

OPINION（編集後記にかえて）

今回の発表をまとめるにあたり関連資料を収集したり、貴重な所蔵史料をお借りしたりしてまとめてみました。全体の寺子屋教育の実態と日本教育史の中における意義付け、日本が近代社会に移行する中での寺子屋教育の果たした意義については、これまで多くの先行研究の中で一定の結論が出されており、実態についてもほぼ論究され尽くされてきていると思います。この地域についても県史・市史の編纂過程で資料は提供されています。

その中で、大変刺激を受けた論考がありました。『私塾—近代日本を拓いたプライベート・アカデミー—』（R・ルビンジャー著）です。異文化から見た視点で考察された日本の寺子屋教育の分析は、今日の日本の教育問題を考える上で貴重な視点であり、大いに参考にすべき分析であると思いました。地域研究で陥りがちな過ちと、留意しなければならない点は、単なる地域の個別研究に終わってしまうことです。語弊恐れず言えば、「郷土史」的な枠に縛られて全体史の中の位置付け意義付まで論究する生産的な研究にならないものが少なからずあるということです。今回の寺子屋教育の地域の実態を調べる中で、各地域についての自治体等の市史、町史で紹介されている資料・史料を今日の教育問題の混迷を紐解く手がかりにしてゆけないかと考えました。寺子屋教育研究の意義は、今日の教育問題解決の原点・源泉の意味をもつ重要なテーマであると思いました。（文責：河地 清）

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報対： <http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索 